

令和4年度学校経営構想

1 はじめに

今の子供たちやこれから誕生する子供たちが成人し、社会で活躍する頃の日本は、生産年齢人口の減少やグローバル化の一層の進展、人工知能（AI）の飛躍的な進化を始めとする絶え間ない技術革新により、社会構造や雇用環境は大きく変化し続けており、今よりさらに、近い未来の予想すら困難な時代になっている。

また、急激な少子高齢化が進む日本にあつては、1人1人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが必要である。そうした中、日本はIoT（Internet of Things）やAIで全ての人とモノが繋がり、様々な知識や情報が共有され、必要な情報が必要な時に提供されるような新たな社会（Society5.0）の仕組みづくりに挑み始めている。

この先にある時代を担う子供たちには、様々な変化に主体的に向き合うとともに、これまで日本が築いてきた伝統や文化を大切にしながら、高い志や意欲を持つ自立した日本人として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、持続可能なよりよい社会を形成していく力を身に付けることが求められている。それらの力を確実に身に付けさせていくためにも、昨年度より完全実施となった新学習指導要領の理念のもと、学校として子供たちに身に付けさせたい資質能力や各教科で学ぶべき内容などの全体像を明らかにして、それぞれの子供の興味や関心を基に、1人1人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出すことを意図した教育活動を行っていかねばならない。

一方、中学校教育の現状を見ると、子供たちの多様化（特別支援教育を受ける生徒や外国人生徒の増加、貧困、いじめの重大事態や不登校生徒の増加等）への対応や子供の学習意欲の低下、コロナウィルスに始まる、今後起こりえる新たな感染症等への備えとしての教室整備や指導体制等の充実など、様々な課題が指摘されている。子どもたちの命や安全を守りながら、これらの課題に対応していくためには、学校を教職員の力だけでなく、家庭や地域の教育力を生かしたり、関係諸機関との連携を図ったりしながら創っていく「地域と共にある学校」を推進していくことが必要不可欠である。

これまで述べてきた状況や考え方を踏まえ、コミュニティスクールの機能を十分に生かし、今年度も教職員、家庭、地域が一つになって、よりよい学校づくり、人づくりに取り組んでいきたい。

2 昨年度の南部中学校

令和2年度に引き続き、ウィズコロナの学校運営を余儀なくされる中で、令和3年度の重点目標を「主体性」をキーワードにして「子どもが主役、輝く個性」～自ら考え、主体的に行動する生徒～と定め教育活動を実践してきた。

目標を持ち、子どもが主体的に学ぶことができる「わかる授業」「魅力ある授業」の創造、生徒が前面に立ち活躍する場面を創出する生徒会活動と学校行事、生徒に失敗を恐れず、勇気をもって挑戦する「トライ&エラー」の推奨等を経営の重点に据え取り組んだ1年は、コロナの影響により予定通り実施できた活動、方法や時期を変更して実施した活動、残念ながら中止してしまった活動と等様々であったが、あくまで「子どもファースト」で、子どもを中心に置き、子どもの思いを尊重しながら、子どものために何ができるか、どうすればできるかを考える、というスタンスで、その時その時で職員で話し合い、納得解を作り出しながら最善の選択をすることを心掛け取り組んできた。

そんな1年の教育活動を振り返ると、昨年度より導入された1人1台タブレットの活用によって、学習活動において主体的な取組が増えたり、躍友祭や緑友祭などの行事、生徒会活動等において、子どもたちが主役となり、生き生きと自己表現する姿が見られたり、日常生活ではコロナの感染防止に対する個々の意識が高まり、主体的な行動に結びついたり、一定の成果は得られたと感じているが、2学期末の学校評価アンケートの結果から見えてくる生徒の実態や、保護

者、教師の期待といった面からから考えると、現状で満足することなく、さらに高みを目指していけると考える。

3 令和3年度学校評価アンケートから

【豊かな心】（生活部）に関して

- 「学校が楽しいと思う」、「私たちの学級（学校）は、互いにルールを守り協力する雰囲気がある」については生徒、保護者、教師とも肯定的である。
- ▼「挨拶や返事がしっかりできる」については、生徒、保護者は肯定的だが、教師は約半数が「そうではない」と感じており、意識の差が見られる。
- ▼「南部中に誇りを持っている」の設問では、生徒、保護者、教師とも約8割が肯定的に捉えているが、9割以上を目指したい。

【豊かな心】（特別活動部）に関して

- 「生徒会活動や係活動に意欲的に取り組んでいる」、「躍友祭、緑友祭等の行事に意欲的に取り組んでいる」については、生徒、保護者、教師とも肯定的である。
- ▼「地域の行事やボランティア活動に参加している」、「地域の歴史や自然について関心がある」については、生徒、保護者、教師とも肯定的と回答する数が少ない。

【確かな学力】（学習部）に関して

- 「授業の内容がよく分かる」、「あじさい（総合的な）学習に進んで取り組んでいる」については生徒の約9割が肯定的である。
- 「パソコン等を使い、自分の考えをまとめたり、伝えたりすることができる」「授業や家庭学習で、タブレットやパソコンなどを使って学習に取り組んでいる」についても生徒の9割以上が肯定的である。
- ▼「授業中に先生や友達の話聞き、進んで自分の考えを発表している」、「進んで先生に聞いたり、自分で調べたりして学習している」については、令和2年度よりも向上しているものの、肯定的に捉えているのが生徒で7割強、保護者で5割強、教師で約6割とやや低い
- ▼全ての設問で保護者は生徒よりも10~20ポイント程度数値が低くなっており、生徒の努力の成果や過程が保護者に伝わるような工夫が必要である。

【たくましい体】（生活部〈保健〉）に関して

- △「規則正しい生活が身に付いている」については、生徒が8割、教師が9割肯定的に捉えている。「食育指導を通して食に関する意識が高まっている」については、生徒が7割、教師が8割肯定的に捉えている。ただ、これも保護者の数値がやや低いため、学校生活で培った知識や行動力を家庭でも発揮させる場を用意したい。

【保護者/教員】に関して

- 「南部中のホームページを見たことがある」については、約9割の保護者が肯定的な回答をしている。
- ▼「南部中で目指している子どもの姿や、教育内容について知っている」について肯定的な回答は約7割であり、全ての保護者に、南部中が目指す学校像や生徒像について知ってもらえるようにしていきたい。

4 教師から見た、学校、生徒の実態

- 大変落ち着いて校内生活を過ごしており、校内のきまりを意図的に破ろうとする生徒や、対外的な問題行動、違法行為をする生徒がほとんどいない。
- 委員会や学級の係の仕事に熱心に取り組み、責務を果たしている生徒が多い。
- 体育大会・合唱コンクールなど、各種行事に前向きに取り組んでいる。
- 地域の方への挨拶や校外での活動で、好印象をもっていただけることが多い。
- 困っている友だちがいると優しく声を掛けたり、手助けしたりすることのできる生徒が多い。
- 一人一台のタブレット端末を積極的に活用し、授業や生徒会活動を深化充実させている

- ▼コロナの影響もあるが、朝の挨拶の声が小さく、挨拶当番や職員の前を無言で通過していく生徒がいる。
- ▼些細なことで学校に来られなくなってしまうたり、コミュニケーションが上手く取れず友人とのトラブルなどを自分の力で解決することができなかつたりする生徒が見られる。
- ▼学習に対し目標をもって粘り強く取り組む姿勢や、家庭学習習慣の定着に差が見られ、それが学習内容の定着の差にも繋がっている。
- ▼自己判断に任せられると的確な判断ができず、消極的な言動になったり、周囲の目を気にして、自分を出せなかつたりする生徒がやや多い。物事をスマートにこなそうとする一方、熱意やがむしゃらさが感じられない。
- ▼増加している外国籍の生徒も含め、自分の将来への展望を描くことができる生徒が少ない。

5 令和4年度の基本構想

令和4年度も昨年度同様、「主体性を育む」といった根本的な考え方は変えず、「主体的に行動した結果、自信を深めたり、失敗経験を生かしてたくましさが増したりすることで、自分の新たな良さや可能性を発見し次の行動へ繋げる」といった、主体的な行動の先にある姿の実現を目指しながら、これまで述べてきた課題の解決に繋がっていきたいと考えます。これは、新学習指導要領の前文に書かれている、「1人1人の生徒が自分の良さや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすること」という方向性にも合致しています。以下、本年度の経営構想とします。

○学校教育目標

『自ら学び 共に生きる たくましい生徒』（令和元年度より、来年度4年目）

それぞれの目標で期待する生徒像

「自ら学ぶ生徒」・・・学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的に学ぶ」生徒。

「共に生きる生徒」・・・思いやりの心や感動の心を持ち、集団の中で一人一人の存在感が認められ、相互に高め合っていくとともに、地域に生きる人として、地域社会のために貢献しようとする「主体的に行動する」生徒。

「たくましい生徒」・・・「自分が自分であって大丈夫」という自己肯定感をもち、何事にも失敗を恐れず、勇気をもって取り組むことで、自分の可能性を見つけ、広げようとする「主体的に挑戦する」生徒。

○重点目標（～こんな南部中生になってほしい～）

「主体的に行動し、自分の良さや可能性に気付くことができる生徒」

○学校経営の基本方針（マニフェスト）

- 1 新学習指導要領、令和の日本型学校教育の理念に基づいた教育活動を実践します。
- 2 GIGAスクール構想をさらに深め、1人1台端末の効果的な活用に向けた探求に努めるとともに、「主体的、対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組みます。
- 3 身近な地域や社会と接点を持ち、多様な人々と繋がりを保ちながら「地域と共に子どもを育てる学校づくり」を推進するとともに、持続可能な社会の創り手として、社会に貢献できる生徒の育成に努めます。

- 4 職員が「ONE TEAM」となり、地域から信頼され、安心して生徒を任せられる学校作りに努めます。

○ 経営の重点

1 方針1に対して

- (1) 「主体性」をキーワードに、全ての教育活動を「主体的に行動し、自分の良さや可能性に気付くことができる生徒」を目指したものにしていく。
- (2) 全ての生徒に学級内に自分の居場所があり、果たすべき役割がある、「居場所づくり」と「絆づくり」を意図的に行うことで、「自分が自分であって大丈夫」という自己肯定感と、「自分は誰かの役に立っている」という自己有用感を育む。
- (3) 生徒に失敗を恐れず、勇気をもって挑戦する「トライ&エラー」を推奨する。教師も信じて、任せて、認める「信・任・認」のスタンスを大切にするにより、生徒の意欲や粘り強い取り組みを引き出す。授業では、「分からない」が言える環境を教師と生徒で作出す。
- (4) 各教科を学ぶ意義や教科独自の見方、考え方、身に付けさせたい資質・能力等を明確化し、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」についてガイダンスで意識づけを行うとともに、学習の評価、振り返りを使って「何が身に付いたか」を生徒と教師で共に確認する。
- (5) 各教科で身に付けた資質・能力を結合する視点としてSDGsを用いる。各教科の関連単元でSDGsの視点に沿った授業を行い、上記のガイダンスや振り返りもSDGsの視点で行うことで、持続可能な社会の創り手としての自覚を高める。また、総合的な学習や特別活動における探究的な活動をESD（持続可能な開発のための教育）を基盤として組織し、これらを核としながら、各教科の知識・技能などと関連付けて学習させる。これらについては、キャリアパスポートへ確実に記入を行う。

2 方針2に対して

- (1) 主体的、対話的で深い学び、個別最適化した学びにつながる、1人1台タブレットの効果的な活用研究を継続する。効果的な活用研究に際しては、校内GIGAチームや研修主任が中心となり、組織的に進めていく。
- (2) 正解が一つではない問いや、生徒にとって魅力的な課題を用意したり、時には生徒自らに課題を設定させたりし、主体的に課題解決（探究）に取り組む場面や、学習の成果を仲間に発表する（プレゼンテーションする）場面を意図的に設定する。INPUT中心からOUTPUT中心の授業への転換を図る。
- (3) 様々な理由で登校できない生徒へのオンライン授業、取り出しの生徒を中心とした外国籍の生徒の学習の一助となる活用に積極的に取り組む。

3 方針3に対して

- (1) 学校公開週間、各種行事を利用し、学校に来てもらう、見てもらう機会を可能な限り設け、広くご意見を伺う。また、学校HPや便りを使って、積極的に情報の発信に努める。
- (2) コミュニティスクールの機能を生かし、CSD、学校運営協議会委員、PTA役員の皆様の力を借りながら、地域人材に学校の教育活動への積極的な参画をお願いする。
- (3) 学府小学校、幼稚園との交流活動や、交流センターでのボランティア、SDGsに関連する活動など、学校生活で培った力を学校の外で発揮する機会を創出する。

4 方針4 に対して

- (1) 全ての生徒を対象とした成長を促す生徒指導の実践により、いじめや問題行動の未然防止、早期発見・早期対応に力を入れて取り組む。
- (2) 新規不登校生徒を生まない、減らすために、早めの相談、情報の共有によって、チームで迅速に対応する。必要に応じてスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーにも参加してもらい、ケース会議も実施する。
- (3) 教師が常に生き生きとした表情で子どもの前に立てるよう、カリキュラムマネジメントを進め、残業時間の上限目安月 45 時間、年 360 時間の達成を目指す。特に部活動については、ガイドラインに沿った適切な部活動の実施とともに、外部指導者との連携等、新たな運営の仕組みを考える 1 年とする。